

<実践報告>

神戸大空襲に遭遇して

—私の失ったもの—

石野早苗

1. 疎開地から神戸へ

私は神戸市兵庫区にある薬仙寺というお寺で三人姉妹の三女として生れ育ちました。

1944 年、日本とアメリカの戦争がだんだんと激しくなり、都会に住んでいる老人と子供達は安全な田舎に疎開をするようにとの国からの命令で、私は 7 月に祖母と一緒に奈良の親戚の家に縁故疎開をしました。そこでお盆を過ごし、お正月を迎えました。両親や姉たちのいないお正月は、淋しいものがありました。3 月になって隣村に住んでいる親戚の叔父さんが病気で亡くなり、お葬式に神戸から母が来ました。私は8ヶ月振りに母の顔を見ると、今まで我慢していた心細さが一気に吹き出して、どうしても神戸に帰りたく思い、母の側を片時も離れようとしませんでした。

母は私に「神戸に帰ったら怖い怖い空襲に遭うのよ。神戸は危険で一杯なの！」だからお祖母さんと一緒にいるようにと、一生懸命に言い聞かせましたが、どうしても母と神戸に帰りたい私は「どんなに怖い所でもいい、どんな事でも我慢をするから神戸のお家に帰りたい」と何度も何度も言い続け、母を困らせました。とうとう根負けした母は、私を神戸に連れて帰ってくれる事になりました。私は父や姉たちに会えると思うと嬉しくて大はしゃぎをしました。



これは宝塚の遊園地で撮った写真です。4～5歳だったと思います。この頃、ロバに乗るのが好きでよく遊びに行きました。右手が無くなってからは人に会うのが嫌で、自分一人で行く動物園に行ったものです。

2. 奪われた私の右手—1945 年 3 月 17 日—

神戸に帰ってきて、ちょうど一週間目の 3 月 17 日午前 1 時 58 分、あの神戸大空襲に遭いました。B29 爆撃機はいつもより多くの編隊を組み、何とも言いようのない不気味な爆音が大きく低くブーンと聞こえると同時に、空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り響き、私は胸が押し潰されそうな息苦しさを感じました。

両親と初光姉さんは消火活動に備え、家を飛び出します。当時女学校 1 年生の長子姉さんと私は大急ぎで身支度をして、庭に作った防空壕に避難しました。ほっとする間もなくヒューンヒューンヒューンという音が聞こえ、B29 から焼夷弾が雨あられのように落ちて来ました。約 30 cm の間隔で足の踏み場も無い位のすさまじい量でした。辺り一面は火の海となり、焦げ臭い熱風が吹き荒れています。その時、父が防空壕の蓋を開けて「二人とも防空壕から出て来なさい！」と大きな声で叫びました。父は、3 月 14 日の大阪大空襲で防空壕に避難した人達が大勢蒸焼になった事を知っていたので声をかけたのだと思います。

長子姉さんが先に出て、私が出ようとした時にまた、ザザザザザ……という音と共に、エレクトロン焼夷弾がまるで滝のようにたくさん落ちて来ました。その中の 1 つが防空壕から出ようとして手を伸ばしている私の小さな右手に直撃しました。アッという間の出来事です。鈍い衝撃を感じ、ふと見ると、オーバーやセターの袖はあるのに、肘から先の右手が飛ばされてなくなっています。

私は驚いて「お父さん、早苗のお手々が無くなっちゃったよー！字も書けないし、学校にも行けないよー」と思わず大きな声でそう叫びました。両親は大変驚きましたが、父が腰に下げていた日本手拭で止血をしてくれました。母は私を抱いて大急ぎで石段を駆け下り、お寺の広場に町内で作った大きな防空壕の側に座り込み「私達はもうここで死にますーッ」と叫びながら泣き崩れました。その時、私は母の膝の上から肩越しに、防空壕の入り口にいる若いお母さんと三、四才位の女の子の防空頭巾が燃え、髪の毛がパチパチとはぜる音がして、着ている物に燃え移ろうとしているのに泣きもせず、ただ目をつむってジーッと抱き合っているのを見て、どうすることも出来ず、私もあの様にして死ぬんだっ…と思い、その恐ろしさから思わず母にしがみ付いた事を今もはっきりと覚えています。

その時、父と初光姉さんが駆け付け「しっかりしろ！橋が焼け落ちてしまったらどこにも逃げられなくなる！」と母を奮い立たせて、父は私をおぶい、燃えさかる炎の中を今の須佐野中学校(当時は道場国民学校)まで必死に走り続けました。

3. 痛みへの躊躇い

やっとの思いで学校に辿り着きました。しかし、救護班の人もいません。避難をしている人たちがいっぱいです。私は職員室に寝かされました。喉が渇いて焼け付くようで「お水が飲みたい」と声を振り絞りました。父は「水を飲ませては駄目」と言いました。母は私の名前を呼び続けています。電気も付かない、水道の水も出ない中を初光姉さんが小さな器に水を持ってきてくれました。それを一口飲みました。後で聞いたのですが、その水は防火用水の水だったそうです。

空襲も少し収まったので父に背負われて松原通にあった交通局病院に行きました。病院の廊下には、担架に乗せられたまま枕元にお線香を供えられて亡くなっている人や額からたくさん血を流している人、火傷で皮膚がぶら下がっている人たちなど、怪我をしている人たちが溢れかえっていました。まるで地獄の絵を見ているようでした。やっと私の順番が来て診察室のベッドに寝かされました。その時です。病院の先生が私の傷口を見て「ワーこれはひどい。まるでザクロのようになっているから上腕で切らないと」とおっしゃりました。父がカーテンの向うで先生に「お願いします。何とか関節だけは残してやってください」と一生懸命頼んでいるのが聞こえました。

診察室の中は電気も水道もありません。ローソクの灯りだけしかないので、ぼんやりとした明るさです。そんな中で看護婦さんに全身麻酔をされます。今なら注射をするだけでですが、その当時はそんないい薬は有りません。エーテルという薬をカーゼに染み込ませて鼻に当て、ゆっくりと数を数えます。「ヒーツ、フターツ、ミーツ、ヨーツ、イツーツ、ムツツ…」。ムツツまで数えたとき、看護婦さんが「この子は強いわネ」と言ったのをいやにハッキリと覚えています。そして「ナナーツ、ヤーツツ…」までは数えましたが、その後は何も覚えていません。

初光姉さんは私の手の骨をノコギリで切るのを見て気を失ってしまったそうです。そのときは応急処置をして頂きました。今思い返しても麻酔が切れても痛いと言わなかったのが不思議

神戸大空襲に遭遇して

です。いや、言えなかったのです。大勢の怪我人がひとかたまりになっている病院で自分一人が「痛い」ということの躊躇いや家族に心配をかけたくないという気持ちがあったから、言えなかったのです。

4. 日本の敗戦と私の悔しさ

学校に帰りつき、母の姿を見つけた時、左足のモンペの所が破れて紫色に腫れ上がっているのに気が付き驚きました。母は私達が病院に行った後、長子姉さんの姿が見えない事に気が付き、焼け跡を探し回っていたようです。私の怪我の事に夢中で長子姉さんの事が頭から離れていたのだと思います。しばらくすると、学校も焼け出された人達で一杯になり、座るところもなくなり、父が山手病院に行こうと私をおぶい、母の足を気遣いながら、初光姉さんと四人、焼け跡の焦げ臭い道をやっとの思いで下山手通六丁目にある山手病院に行きました。私は幸いにも二階の病室に入院することが出来ました。

父と姉は毎日長子姉さんを探しに出掛けます。入院していても毎日毎日 B29 による空襲があります。夜だけだった空襲が朝に昼にとだんだん激しくなり、山手病院も危なくなってきたので、先生が「どこか疎開をする所はありませんか？」とおっしゃったので、本当は奈良に行きたかったのですが、3月14日の大阪大空襲で現在の JR、その当時は省線電車と言っていたのですが、線路がズタズタでとても奈良には行かれないので、淡路の叔母さんの家に行く事になりました。

西浦の江井の山の上にある家は、空気はおいしいけれど水汲が大変でした。病院に通うのも、父が神戸まで長子姉さんを探しに行くのも、住む家を探しに行くのも、大変苦勞をしました。父がやっと今の中央区再度筋に家を見つけて来て下さいました。

6月5日は神戸に2度目の大きな空襲がありました。この時も沢山の犠牲者が出ました。私達は7月に神戸に帰ってくる事が出来ました。

神戸は一面焼野原です。山手病院も焼けてなくなっていました。B29 爆撃機の爆音を聞くと、私の体は拒絶反応を起こします。これには家族も困っただろうと思います。この家で8月15日の終戦？敗戦？一台湾では何というのかしら？—をラジオで聞いて知りました。大人たちは

“日本が戦争に負けた”ことを悔しがっていました。しかし、私は“この戦争で自分の腕が奪われた”ことを悔しく思いました。

それでも、電気を付けて明るく出来る事、B29 の爆音やサイレンの音を聞かなくても過せる生活はとても嬉しく思いました。それに引き換え、食料がありません。庭に野菜を植えましたが食べる物にとっても困りました。戦時中の配給制度より一段と厳しくなりました。

行方不明だった長子姉さんは、私が中学一年生の時、敗戦から4年目の 1949 年、お寺の焼け跡からお骨になって出て来ました。お寺を継いで下さった後藤さん御夫妻がやはり食べ物が無くて畑を作ろうと土を掘っていると、本が好きだった長子姉さんは百科辞典の背表紙と一緒だったそうです。「私のお手々もきつとどこかにあるだろうな、焼け跡を探しに行こう？」とずっと思い、しかし、そう言いたくても母を悲しませるのが辛くて、とうとう言い出すことが出来ませんでした。



長子姉さんの写真。5歳くらいだと思います。お正月の時に撮影したものです。神戸の空襲で長子姉さんは亡くなりました。お骨が見つかったのは、空襲から4年後の 1949 年でした。

5. 右手が教えてくれたこと

ある日、こんな事がありました。私が本を読んでいる時に、母が「早苗ちゃんおやつですよ」と配給のメリケン粉で蒸しパンを作って持って来てくれました。この時「ハイ、アリガトウ」と言って無くなった右手をつい出してしまい、母は困ったような悲しい顔をしています。そんな母の表情を見て、首を縮めて笑いながら慌てて左手を差し出し、私は「アナタはもう右手が無くなってしまったのだから、これからは左手だけで何でもしなければならぬのよ！」と自分に言い聞かせる事が何度もありました。

怪我をして以来、67 年間生きて、いや、生かされて来たのかもしれませんが。それは決して自分の力だけではなく、家族を始め、沢山の人々が力を貸して下さり、助けて下さったからこそ現在の私があると思います。それにはいつでも感謝しています。

私は大切な大切な右手を無くして、とても悲しく辛い思いをたくさんしました。でも、悲しんでばかりいても、トカゲの尻尾のように生えて来るわけではありません。「お猿さんの手でもいいからほしいな」と言って家族を困らせた事もありました。でも、これは私が生きている、命があるからこそ言えることなんです。長子姉さんのように熱い炎に包まれて、煙にまかれて、4 年もの永い間、冷たい土の中に埋まったまま見つからなかったなんて、お骨を拾うまではきっとどこかで生きている、と私たち家族は信じていたのです。戦争さえなければ長子姉さんは元気だと思います。

神戸の空襲で、いえ日本国中が受けた空襲で大勢の尊い命が亡くなり、出生をして戦地に行った兵隊さんも激戦地では多くの尊い命が奪われました。

空襲体験のない皆様方には、戦争の恐さ、恐ろしさがよく解らないと思いますが、私は国民学校三年生の時に身を以って体験しました。私が体験したような悲しい出来事をもう誰にもしてほしくありません。本当に戦争は何もかも奪い去るのみです。何も残してはくれません。住み慣れた家を焼かれ、大事な家族を亡くし、何の罪もない人の尊い命を奪い去る悲惨な戦争はもう絶対にあってはならないのです。二度と起こしてはいけないのです。

戦争を知らない若い世代の人たちでも戦争の悲惨さを考え、想いを巡らせる事は出来ると思います。体験をした人達が少なくなっていく中で、今の平和を守っていくために、若い世代の人達に自分の戦争体験を語り継ぎ、命の大切を伝え、平和な社会を守り育てて下さる事を願います。

私たち「神戸空襲を記録する会」は、ささやかな力ですが、神戸で空襲があった事を少しでも多くの方々に語り継いでいきたいと思っています。どうか世界中から戦争がなくなり平和な世の中になる事を祈っております。



(いしの さなえ 神戸空襲を記録する会)

後記



1945 年、太平洋戦争末期、アメリカが神戸を爆撃した。そのとき 9 歳だった石野さんはご両親と二人のお姉さまと神戸にいた。命は助かったが、片方の腕を失った。77 歳となった今、石野さんは神戸空襲を記録する会に入り、この日は、腕をなくしたこれまでの人生をどのように歩んできたのかを語ってくれた。学校で字を書くとき、服を着るとき、仕事をする場合、炊事洗濯など家事をしたり、親や姑の介護をしたりするとき、そのときそのときの気持ちを石野さんはいきいきと流れるように語ってくれた。そして、聞いている私たちはそのやさしい語りとやんわりとした笑顔に涙ぐんだ。

なぜこの体験を語り続けるのか？と伺った。戦争の残酷さを知ってほしい、今の平和を大事にしてほしいと答えてくださった。

神戸大空襲の中の一人の負傷した子供の体験は、大きな大きな戦争の物語の中のほんの片鱗でしかないかもしれない。が、この人が、その一生が、そのまま目の前にいらしている。われわれはどのようにこの時代や事件を記憶すべきなのか？あるいはどの部分をどういうふうに忘却すべきなのだろうか？

黄淑燕

2012 年 7 月 29 日、「越境する移動と定住 ---神戸ツアー2012」の一環として、甲南大学の平生記念会館二階で空襲で片腕を失った石野早苗さんにお話を伺った。

